

私のCD愛聴盤

「あなたが一枚だけCDを持つことを許されて無人島に行くことになったら、何を持ってゆきますか」というような質問をされることがある。以前はLPだった。

いわゆる一枚の愛聴盤ということだが、一枚だけ、というのは不可能だ。クラシックでも、歌、ピアノ、室内楽、オーケストラがあるし、ジャズもポピュラーもあり、自分の曲の合唱もあり、童謡もある。

私は子どもの頃からオーディオに興味があつて、ディスク、テープ、CDも非常に沢山あり、買ってきてまだ封を切つてないものもある。非常に多くある上に、毎月新しく次々と発売されている。

今年（九三年）は今まで非常に忙しくてCDを買いに行く暇があまりないので、最近のものはないが、忙しい間、いつもきいてみたいと思う今の愛聴盤は色々ある。

昔、若い時はLP時代になってフォーレの「レクイエム」、グヴァツの歌ったカントループ編の「オーヴェルニユの歌」などだったが、その後ジョン・バルビローリ指揮ハルレ交響楽団のDイリアス「春初めてのカッコウを聞いて」等のオーケストラの小品集が好きでよくきいた。これが後でCDになったが、アナログをデジタルに直した方法が悪く、音が不自然になり、地味な音だがアナログのDイスクの音の方がきき易い。こういうのをきいて、デジタルよりアナログの方が音がいい、と思つたらこれは間違いで、最初からデジタルで録音した優秀録音のCDの音は全く素晴らしい。

さて十代の少年時代、一番よくきいて好きだったコルトー、ルービンシュタインの復刻盤もCDで随分出ている。録音が如何にも古いから、今の若い人には向かないが、ルビンシュタインの方はかなりいい音のものもあり、またコルトーは、独得の名演もあつて、ショパンの真髄をきかせてくれる。

私は歌曲の作品が多いし、今でも作っているので、歌曲のCDはよく聴く。一番多く聴くのは、R・シュトラウスで、その中でもFイツシャー||Dイスカウの歌で、グラモPHオンから出ているサヴァリツシユの素晴らしいピアノ伴奏の一枚である。この他東芝EMIから出ている三枚一組の中々いい。両方ともいいが、これはバリトンなので調が下げてありピアノの音も低くなる。原調の方がピアノの音がきれいなので、ソプラノのいい歌手で新しい録音のものを探していた。あつた。

バーバラ・ボニー（ソプラノ）ジェフリー・パーソンズ（ピアノ）で、ヴォルフとR・シュトラウス歌曲集である。（グラモPHオン）

バーバラ・ボニーは一九五六年生れのアメリカの歌手で詳しくはその解説書に出ているが、とにかく素晴らしく、私の理想的な歌い方だ。美しく澄んだ声（力みがない）、しかも正確な音程で揺れが全くない。これこそ最高のリード歌手といえる。（彼女はオペラでも活躍しているが。私はヴォルフの方は

あまり聴かないで、シュトラウスばかり聴いているが、声の美しさ、曲の素晴らしさ、最高の歌曲の雰囲気味わえる素晴らしいCDだ。」

しかしもう一枚、歌曲最高のCDがある。

アーリーン・オジェー「愛の歌」

名ソプラノのオジェーが、名手ポールDウインのピアノで、優美にそしてリリカルに歌いあげる珠玉の愛の歌」という言葉が書いてあるCDで、レーベルは、DELOS三〇二九。

輸入盤だが日本の発売元は(株)アルファエンタープライズ。

このCDは、私の家内が親しいD・ポールDウインから「今度こんなCDが出来たからきいてみて」といって、渡されたものだが、私もきいて、あまりの素晴らしさに驚嘆した。

ピアノ伴奏の歌曲でこれ程美しいものはめったにない。歌は勿論、ピアノ、録音、曲、すべて素晴らしい。(曲はすべてではないが。)

最初のコープランドの曲は現代曲ですぐにはなじめない歌だが、二番目のフェルナンド・オブラドルスと三番目のオヴァレ(発音が違うかも知れないが)というスペインとブラジルの作曲家の曲は日本ではまだあまり知られていないが実にいい歌だ。演奏は正に最上で、魅力にあふれ何度きいても素晴らしい、そしてゆの美しさの大切なことが身にしみて感じられるような数々の名曲、名演がこのCDの中にある。(オジェーは九三年六月十日に亡くなった。)

日本の歌手で、最初から最後まで力を入れたで歌いっぱなし、大きい声を出せばいい、と思つていような人にぜひきいてもらいたいCDだ。

オジェーのCDは他にもいくつかあるが、特別いいと思つたものはなかったが、これだけが特別のようだ。これは録音が非常にすぐれていることが大きな原因で、ピアノの美しさも最高である。ダルトンは私の曲も弾いてくれているが(スゼー・アメリカン等の伴奏)日本の歌手の伴奏もしている。器用なピアノISTではなく、よく練習していない時は、全く上手くない。しかし得意な曲で、よく練習してある曲は実に素晴らしい。このCDは誠に見事である。全曲がすべて最高の曲で、最高の演奏というものではないが、心からおすすめ出来るCDである。

前のバーバラ・ボニーが若い清純な声とすれば、オジェーは中年のふつくらとした、暖かな声といえるようだ。

この他にも一枚好きなCDがある。

オーケストラ伴奏の「モーツアルトのアリア集」、歌はキャスリーン・バトル。アンドレ・プレヴィン指揮、ロイヤル・PHイルハーモニック オーケストラ。東芝EMI。

これも何度きいてもいい。バトルはモーツアルトがとても合うと思う。ただこのCDの一曲目の最高音で、きき苦しい声になるので、いつも二曲目からきくことにしている。これを最初にきいたのは苗場のスキー場で、十二月の末、窓の外のゲレンデは真白の積雪と、雪が静かに降るマンションの一室

で、すべてを忘れてききほれた。その時のことが忘れられない。冬になると苗場のマンションにスキーと原稿書きによく出かけるが、あとモーツアルトのピアノ協奏曲（内田光子さんの録音がいい、演奏も勿論）もよくきく。私はピアノが好きだから、ただのオーケストラだけのものより、ピアノ・コンチエルトがいい。モーツアルトは心が静かに休まり、そして静かにたかまるのである。

歌曲で忘れられないのはフランス歌曲で、私は特にフォーレが好きだから、昔からLP時代を通してよく聴いている。今は東芝EMIのフォーレ歌曲全集、エリー・アメリンクと、ジェラルール・スゼー、ピアノがダルトン・ボールDウインのCDが貴重な存在だ。

外国曲だけでなく、日本の歌曲にも愛聴盤のCDがある。

最近、レコード会社が発売するのではなく、声楽家が自分で自分の好きな曲を選んで一枚作る、という方法で色々なCDが出来るようになった。質の高さから言えば、会社一般発売しても当然なのに、クラシックの歌曲がレコード会社の採算に合うことがなかなかむづかしいので、何人かの人を除いては、殆んどプライベート的な発売になっている。

CD以前に、ビクターからLPで日本歌曲の大全集が出た（最近CD化された）。これは非常に大切な記録で、中に私の作品も何曲か入っているが、その前にキングレコードから、私の歌曲全集（LP五枚）が出た。伊藤京子さんを中心に「六つの子供の歌」「三好達治の詩による歌曲集」「こどものための八つの歌」などで、それらは現在一枚だけCD化されている。伊藤京子さんが一番活躍していた時

で、録音は大分前のものだが、川村深雪、三浦洋一氏のピアノも非常にいい演奏なので、今でも時々深夜にきいたり、新しい人のCDときき較べをしたりする。私にとって有難い記録である。

ずっと以前から日本歌曲のレコードは、ほんの少しずつ、年に二、三枚程度出ていたが、レコード店の片隅に、目立たないように置かれていた。そんな状況を打ち破って、日本歌曲を表舞台に出して、もっと多くの人にその素晴らしさを知らせた歌手は鮫島有美子さんである。発売されたCDはいつもクラシック洋楽部門の売上げベストテンの中に入り、ヤマハの銀座店のレコード売場の目立つ所に何枚も並べられるようになった。

最近では松本美和子、東敦子、中沢桂、中村邦子、瀬山詠子、三宅春恵、佐々木成子といった日本の代表的歌手のCDが作られており、ポピュラーの世界と較べると非常に地味ではあるが、日本歌曲の存在の大切なことがよくわかる。

ところで有名な一流歌手でなくて、もう少し若い世代にもすぐれた歌手がおり、それぞれいいCDを自分で作っている。そういうCDの中で、私が特に推薦したい歌手が松倉とし子さんで、山形県出身で、まだあまり知られていないが、日本歌曲を自然に素直に歌い、爽やかである。特別にすぐれた美声ではないし、一流歌手のような声量はないが、魅力があるのだ。美しい大きな声で堂々と、立派に歌うのいいが、各家庭で聴くようなCDには、直接聴き手の心に訴える、やさしい情感が必要である。松倉さんの歌った橋本国彦の「お菓子と娘」、山田耕作的「かやの木山」、畑中良輔の「秋の空」など、私

が今まで聴いた多くの歌唱と一味違った魅力を感じるのである。この最初の一枚には私の曲も何曲か入っており、堀内幸枝詩の「ひなの日は」が私の特に好きな歌い方である。「優しい調べとともに」(ハピエコー社・制作)

このCDは私が「声楽家は年を取ってくれば、次第に声も衰えてくるから、一番調子のいい時に、自分の好きな歌で記録として一枚作っておいたら」とすすめたのである。

キングレコードで作ったのだが、ピアノ伴奏、録音がよかったので、想像以上のものが出来た。「音楽の友」、「音楽芸術」誌に送ったら大変いい批評をいただいた。

その後二枚目のCDは私の作品だけで、そして三枚目が金子みすゞの詩による私の新作「童謡歌曲集」「ほしとたんぼぼ」全十四曲を中心として、新しい作品を主に作られたものである。

一般に今までの日本歌曲、童謡のCDは、どうしても大正から戦前の古い作品が中心で、ゆっくりしたモル(短調)の曲が、何曲もつづくと、きいていて暗い気持ちになり、しんねり、むっつりが気になって憂鬱な気分になってしまう。松倉とし子さんのCDは新しい曲が中心になっているのでその点が非常にいい。

私はモーツァルトもブラームスも、長調の曲で、悲しき、淋しさを感じさせるから名曲なのだ、と思っているから、長調の曲が好きだ。

金子みすゞは、最近JURA出版局より、その伝記が出版されたが、明治三十六年山口県の仙崎村

(今の長門市)に生まれる。大正末期、すぐれた作品を発表し、西條八十に「若き童謡詩人の巨星」とまで称賛されながら、二十六歳の若さで世を去った。没後その作品は散逸し、幻の童謡詩人と語り継がれるばかりとなったが、同書著者である童謡詩人・矢崎節夫の努力により、作品の全貌が顕らかにされ、注目をあびている。(同書の帯より)

この矢崎氏から依頼されて、私は一九八九年の秋に「ほしとたんぼぼ」を最初に作曲し、一九九一年の七月に十四曲目が完成した。

私が最初に作曲した歌曲集はやはり童謡の詩に付曲した「六つの子供の歌」で一九四七年のことである。それから約四十年後にこの歌曲集が出来た。初演は演奏会、CDも松倉とし子さんと、その声、歌い方を想定して作ったが、私の考え通り、それ以上に歌ってくれたから大変満足している。そして私が一番重要視している録音が非常によく、自然で聞き易い音色であり、何度きいてもうるさい感じがしない。とてもいい演奏だが、エコーがつき過ぎたり、ピアノの音が歌のマイクに入って響きが不自然になっているCDがある。新しい日本歌曲のCDの試聴を頼まれると、必ずこのCDの録音と比較してきくので、何回もきくことになる。

自分の曲は、自分でいいと思っても、人はいいと思わず、自分ではいいと思わない曲を、みんながいい、と言うこともあって、なんとも言えないものだ。

金子みすゞの最後の曲の次が芥川也寸志の「やわらかいえんぴつが好きなんだ」で、これは一九七三年に日本童謡賞を受賞した。明るく軽快な楽しい歌なのだが、芥川と親しかった私は、この曲をきくと

彼が死んだことを考えて何か悲しい気持ちになる。この後に團伊玖磨、湯山昭の童謡が続くがこれらもいい曲で、演奏もいい。そして少し若い世代の川口耕平、伊藤幹翁の曲が続くが、私は、こんなに素晴らしい、新しい歌曲があるんだと、この上ない幸福感に満されてしまう。私は何回もきいてしまう愛聴盤CDのベストテンにこのCDは入ってしまう、と推薦のパンフレットにも書いた。(音楽出版ハピーエコー社・制作)

今年第四回を迎えた「奏楽堂コンクール」、西宮青年会議所主催の「日本の歌コンクール」から素晴らしい新人達が生まれている。そして東京にも関西にも質の高いすぐれた声楽家が居り、そのうちにまたいくつかのCDが出来てくるかもしれない。

童謡では前に書いた自作の童謡集を時々、聴くことがある。最近録音された童謡のCDでは、「童謡組」のものが注目を浴びることだろう。私の曲には合唱曲もあるのだが、合唱については二冊目の本に書くつもりだ。

ところで、歌曲は大好きだが、時として生々しい人間の声でなく、またクラシックでもなくジャズを聴きたい時がある。(ロックは電氣的な露骨な楽器の音が好きでないから殆んど聴かない。)

ジャズもソロからフルバンドまで色々あるが、私の好きな編成は、ピアノが中心で、サックスのない

コンボである。サックスはソロでなく、三、または四人のハーモニーがいい。ジャズではないが、ガーシュインの「パリのアメリカ人」で、途中から入ってくる3(スリー)サックスは本当に素晴らしい。これがないと、この曲の魅力が随分少なくなってしまう。

さて、今最高に好きなのは、

ピアノ アンDレ・プレヴィン

ギター ジョー・パス

ベース レイ・ブラウンのトリオで、「アフター・アワーズ」というテラーク盤である。(昔、LPでダイナ・シヨアの伴奏をしているA・プレヴィンのピアノがあまり上手いので驚いたことがある。)このCDは録音も最高である。これは小さなスピーカーでは駄目で、私の所のパイオニアのS-955のウーファーは三十六センチである。十年以上前のスピーカーだが健在で、コントロール・アンプはソイスのC-2301、パワーアンプはTRIOのモノラルL-07MIIが二つ、CDプレイヤーはソニーのZ777ES、大体この位でないと、ベースやギターの本当の音はきこえないようだ。プレイヤーは別として、歌は小型のスピーカーでも、あまり大音量できくことはないから、気にならなくても、このCDは小音量ではつまらない。ピアノはベーセンドルフAで、とにかく素晴らしいの一語につきる。ブランドイを飲みながら、深夜これをきいていると、これぞ音楽だ、本当の現代音楽だと、体の真底からそれを感じることが出来る。三人の名人のアンサンブルは最高である。ドラムはないのに、そのリズムの良さは、リズムの悪い日本のクラシックのピアニストや他の演奏家にもきかせたいと思う。ス

ローの曲が特別に素晴らしい。

もう一枚、ギターがマンデル・ロウに変わって、「アップタウン」というCDが同じくテラークから出ている。これも中々よくてこれを交互にきいている。もう一枚ライブ盤があるが少し落ちるような気がする。この二枚は録音がとにかくよくて、少しVオリウムを上げると、目の前で三人が演奏しているようにきこえる。

指揮はブレヴィンの代りが出来る人は何人もいるが、このピアノだけは代りがいないだろう。九二年の年末にこのトリオが来日した。勿論ききに行った。オーチャードホールの最前列できいたが、やはり素敵だった。後半を後の方の席できいたらピアノの音が全然駄目だった。四十メートルも離れてしまったら本当の音がきけなくなる。

この二枚は私にとって最高のCDである。

私はとにかく、いい音でないと駄目だからトスカニーニの昔の録音とか、ローゼンシュトックの昔のN響時代のテープなんていうのは音が悪いからきけない。最近の録音でも、よくない録音のものは、どんな名人のものでも敬遠する。有名でなくても、たまたま聴いた木野雅之のVアイオリン、アントニ・ヴィT指揮、ポーランド放送交響楽団のシベリウスとチャイコフスキーのVアイオリン協奏曲は、録音がいいので、世界的名VアイオリニスTでも、録音が悪ければ、こちらの方を私は選ぶ。勿論演奏もいい。ポニー・キャニオンから出ている。

今回はこのCD以外は歌曲中心になってしまったが、ピアノ・コンチェルト、交響曲も色々きいている。

その中でこれは絶対最高の一枚だ、というのがある。勿論私はレコード評論家ではないから、そんなに沢山きいているわけではないが、最近色々出ているマーラーや、ブラームスの交響曲をきいていてもやはりこのCDよりいい、というのに会わない。

マーラーの交響曲第4番。インバル指揮、フランクフルト放送交響楽団の演奏である。インバルはマーラーの全集も出しているが、私はマーラーの交響曲の中で特にこれが好きなので、他は持っているけれどあまりきかない。

この一枚を録音の他の盤との比較やオーディオオのチェック用に使っているが、一口でいえば弦楽器の自然の音、中低音の分離のよさ他、例えばサントリーホールがいい席で、生できいているような感じである。このCDのために、一か月の間に三回もCDプレイヤーを買い変えてしまった。録音はデンオンでスタッフの中に三人日本人が入っている。

マイクは二本だけのワンポイントなので驚いてしまう。日本の技術が重要な協力をしているのである。

その後、もう一枚愛聴盤が増えた。

キングズ・シンガーズがピアノのジョージ・シアリングと共演したジャズの名作集が、東芝EMIから「バートランドの子守歌」という名前で出ている。これも楽しく気持のいいCDだ。イギリス出身の

盲目のピアニストで、私より年上だが、いいピアノと本場の六人の男声コーラスである。

今年は半年の間、非常に忙しく、CDを買ってゆつくりきく機会がなかった。夏にはまとめて数十枚買って色々きけば、また新しい愛聴盤が出来てくるかもしれない。(93年 春)

著作権とコピー

他人の労働を盗むこと

安く手に入るからと簡単に無断でコピーすることは、要するに他人の労働を盗んでいるのと同じことなのだ。

楽譜はコピーされることが多いが、特に多いのはコーラスの楽譜である。

以前、ある地方の一流銀行の合唱団の全員が市販されている楽譜をそっくりコピーして、きれいに製本したものでコンクールに出場していた。その時審査員をしていた私と湯山 昭が、そのことを注意し、著作権協会に報告した。

結局その銀行は非を認め、そのコピー譜を廃棄し、その部数の楽譜を購入することで解決した。私も銀行側が変なことを言ったら「おたくの銀行に千円預金して、その預金通帳をそっくり四〇部程コピーして、それが使えますか」といつてやろう、と思っていたがその必要はなかった。

またあるコンサートで、女性はいヴニング、男性は全員がタキシードという立派な服装の合唱団が、私の曲をすべてコピーの楽譜で歌った。

私は後で、「盗んだ楽譜で心のこもったいい演奏が出来るのでしょうか」といつてしまった。かなりきつい言葉だけれど、この位のことをいうとすぐわかってくれるのである。